

<研究ノート>

総督統治下朝鮮の国民学校における地理教育

一 国民科「環境の観察」について

寺 本 潔*

1. はじめに

「国民学校ハ皇国ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ国民ノ基礎的錬成ヲ為スヲ以テ目的トス」(国民学校令 第一条)¹⁾と定めた国民学校制度は、昭和16年4月1日から実施された。この制度は終戦に至るまでの4年余りの間、わが国初等教育の基本にすえられ、同時にその間、国民学校で使用される多くの児童教科書や教師用書、掛図などが作成された²⁾。

このうち、国民科地理の教科書や教師用書、地図帳に関しては、近年、中川³⁾や安藤⁴⁾、有本⁵⁾、筆者⁶⁾などにより詳細な検討が加えられつつある。しかし、これらの教科書類はいわば「内地」の国民学校で主に使用されたもので、「外地」のそれ、すなわち日本統治下の諸地域(例えば、朝鮮、台湾、南洋群島など)の国民学校で使用されたものとその内容を異にしている。従来、近代地理教育史の分野では、こういった日本統治下の諸地域における地理教育の内容に関しては全くといっていいほど検討されてこなかった。本稿の目的は、こうした部分の検討を行うための基礎的な資料を提供することにある。本稿では、とくに総督統治下の朝鮮における国民学校を取り上げ、そこで教授された国民科地理の内容の一端を『環境の観察』教師用書の検討を通して明らかにしたい。

検討するに当たって、渡部⁷⁾や弘谷・広川⁸⁾などによる、朝鮮における植民地教育政策に関する研究のほか、松嶋⁹⁾の歴史教育に関する研究を参考にした。これらは、当時の朝鮮における地理教育の背景を理解する上で貴重な先行研究である。

2. 『環境の観察』教師用書の構成と内容

『環境の観察』教師用書は昭和17年3月、朝鮮総督府著作として発行された¹⁰⁾。同年「内地」

* 昭和56年度教育研究科修了
愛知教育大学教育学部助手

では『郷土の観察』教師用書が文部省著作として発行された¹¹⁾。両書とも国民学校初等科第4学年で使用され、地理教授の入門としての役割を担っていた。つまり、内地における国民学校の教育課程が、外地である朝鮮においても適用されたのである。しかし、「環境の観察」が教育課程上「郷土の観察」と同じ第4学年で実施されたとしても、その内容に関しては必ずしも同じではなかった。

以下、『環境の観察』教師用書について、構成と内容の面から『郷土の観察』教師用書との比較を行いつつ、詳細に検討していく。

(1) 構成について

『環境の観察』教師用書の構成を『郷土の観察』教師用書のそれと比較して示したのが第1表である。全体の構成が「総説」、「各説」、「附録」から成り立っている点は両書とも同じである。最も大きな差異は、「各説」における章立ての違いであろう。章の数が『郷土の観察』の九章に比べ、『環境の観察』はその約2倍の十九章で構成されている。同時に頁数にしても約1.5倍の分量の頁を『環境の観察』の「各説」は費やしている。したがって、『郷土の観察』にはみられない章の題目も『環境の観察』の中に多くみられる。

例えば、「七、人々の仕事」や「十三、仕事場」、「十五、郵便と電信」、「十八、役所」¹²⁾などの題目に相当するものは『郷土の観察』にはみられない。また、「四、空模様」、「五、雨降り」、「六、夏の暑さ」、「十六、冬の寒さ」、「十七、冬の生活」などは、『郷土の観察』の「四、気候」に相当する題目ではあるが、(2)の内容で後述するように、朝鮮の気候、風土を良く考慮したものであると思われる。

一方、『郷土の観察』にあって『環境の観察』にない章がみられる。「八、神社と寺院」及び「九、史蹟」の二つがそれである。これらの教材が『環境の観察』で扱われない理由は、おそらく総督統治下という当時の朝鮮の事情を反映した結果にあるのではないかと考えられる¹³⁾。

(2) 内容について

『環境の観察』の「総説」は、「一、国民学校教育の精神」、「二、国民科国史指導の精神」、「三、国民科地理指導の精神」、「四、『環境の観察』指導の精神」の四章から成り、そこでは『郷土の観察』の「総説」にみられる記述内容とほぼ同様の、国民科の意義や指導方針、国民科地理教材の体系¹⁴⁾、国民科地理指導の留意点（以下に示す）、「環境の観察」の意義¹⁵⁾と地域的範囲¹⁶⁾などに関して解説されている。

しかし、一部に朝鮮という外地の事情を反映した記述もみられる。例えば、「一の(三)教科書とその指導方針」では、「(前略)朝鮮の特殊事情を考慮し、全般に亘って規程の精神

を徹底せしめるために編纂される朝鮮総督府著作の教科書は、必ずこれを使用することを原則とする」という記述がみられる。また、「三の(三)国民科地理指導の留意点」では、次の六点があげられている。

- (イ) 自然と生活との関係を具体的に考察せしめ、特に我が国民生活の特質を明らかならしむること。
- (ロ) 大陸前進基地としての朝鮮の地位と使命とを確認せしむること。
- (ハ) 在外邦人の活動状況を知らしめ、世界雄飛の精神の涵養に努むること。
- (ニ) 簡易なる見取図、模型の製作等、適当なる地理的作業を課すこと。
- (ホ) 地図・模型・図表・標本・写真・絵画・映画等を利用して具体的、直観的に習得せしむること。
- (ヘ) 常に読図力の養成に努め、遠足・旅行・其の他適当なる機会に之が実地指導を行ふこと。つまり、植民地教育としての性格のほか、ある程度、近代的な地理教授法も「環境の観察」は有していたのである。

次に「各説」の記述内容について検討してみる。

『環境の観察』の「各説」は、前述した十九章を「趣旨」、「指導の要点」、「指導例」の3項目から記述している。それに比べ、『郷土の観察』の各章は、「趣旨」、「指導の要点」、「連絡」の項目で記述されている。すなわち、『環境の観察』には他教科との連絡教材を示した部分が記載されていないのである¹⁷⁾。その代わりに、『環境の観察』には、各章ごとに学習すべき月と標準授業時数が記されている(第2表)。これらの章は、朝鮮において最も基準となるべき観察事項を季節や発達段階に応じて配列させた単元として位置づけられ、「郷土の観察」に比べ¹⁸⁾、年間の指導細案の基準をあらかじめ固定されたものとして示しているように思われる。

「各説」の実際の記述を紹介するゆとりは、本稿にはないが、全体として朝鮮の地形¹⁹⁾、気候²⁰⁾の特色を多く教材に取り入れ、常に日本国に奉仕する気持ちや海外雄飛の精神涵養²¹⁾を図っている点で、総督統治下朝鮮の国民科地理という事情を極めて良く反映した記述がなされていると言えよう。

以上、『環境の観察』の構成と内容について『郷土の観察』のそれとの比較を通して検討してきたが、両書には多くの共通部分と差異があることが明らかとなった。これらのとくに差異に関しては、その理由を考察できるだけの資料を得ていないが、総督府による統治下であることと、朝鮮における国民学校²²⁾の就学年限が6年であることが²³⁾が、「環境の観察」の教育内容に少なからぬ影響を与えたと推察できる。

3. おわりに

『環境の観察』教師用書には、同時期内地で使用された『郷土の観察』教師用書との比較検討の結果、共通部分と同時にいくつかの重要な差異がみられることが明らかとなった。これらの差異は、「環境の観察」の教授内容を特色づけるものであり、総督統治下という朝鮮の事情を色濃く反映している。

「環境の観察」が、実際教育現場でどのように教授されたのか、他教科との関連についてはどうであるか等の点に関しては、「日本臣民の効率的な養成」という当時の国家目的の観点に立って検討する必要がある。今後の研究課題としたい。

<付 記>

この小論を今春、停年御退官なさる朝倉隆太郎先生に謹呈いたします。

注及び文献

- 1) 昭和16年3月1日に勅令第148号として公布された。 文部省(1972):『学制百年史 資料編』帝国地方行政学会, p.112
- 2) 中川浩一(1975):国民学校の成立過程。 社会科教育研究 36, pp.13~19
- 3) 中川浩一(1975):日本の地理教育の歩みと動向。 矢嶋・位野木・山鹿編『現代地理教育 講座第Ⅱ巻 地理教育の動向と課題』古今書院, pp.105~174所収。
- 4) 安藤正紀(1979):国民学校時代の学校地理(1) — 「郷土の観察」を中心に、現代的意義を考える — 。地理学報告(愛知教育大学地理学会) 49, pp.21~30
- 5) 有本良彦(1982):地理 所収教科書の解説, および郷土の観察・初等科地図 所収教科書の解説。『複製国定教科書(国民学校期)解説』および『複製国定教科書(国民学校期理科編)解説』ほるぷ出版, pp.129~152, および pp.33~44 所収。
- 6) 拙稿(1981):国民科地理に関する一考察 — 初等科地理(上)・(下)を中心として — 。新地理 29-2, pp.25~35
拙稿(1984):国民学校における「郷土の観察」の特色と意義。筑波社会科研究 第3号, pp.44~53
- 7) 渡部 学(1975):総督統治下における植民地的「実」学教育体制。 梅根 悟監修 世界教育史研究会編『世界教育史大系5 朝鮮教育史』講談社, pp.251~278所収。
- 8) 弘谷多喜夫・広川淑子(1973):日本統治下の台湾, 朝鮮における植民地教育政策の比較的研究, 北海道大学教育学部紀要 第22号, pp.20~92

- 9) 松嶋光保(1980): 総督治下朝鮮普通学校における歴史教育 — 1910年代のその「埋没」と「浮上」 —。教育学研究集録(筑波大学大学院教育学研究科)第3集, pp.135~144。
- 10) 朝鮮総督府(1942): 『環境の観察 第四学年 教師用』朝鮮書籍印刷株式会社, 217p
- 11) 文部省(1942): 『郷土の観察 教師用』日本書籍株式会社, 133p
- 12) 『郷土の観察』の「七, 村や町」においても「ここで村や町といふのは行政区画上の村や町ではなく, (中略)集落をいふ」(p.73)という理由から役所については記述されていない。
- 13) この点に関しては、『初等国史』や『初等修身』などの国民科教科書,あるいは当時の朝鮮総督府による植民地教育政策の検討を通して解明すべき問題であるが,今後の研究課題としたい。
- 14) 「環境の観察」の項に「国民科地理は,生活環境の地理的視察(略して環境の観察といふ)を以て出発点とし,地理教授の入門とする」と明確に述べられている。
- 15) 「『環境の観察』は児童の生活環境に於ける事象を地理的に観察させて,環境に親しみ,これを理會することを目標とする。」とある。
- 16) 行政区画に拘泥せず,学校から徒歩または交通機関を利用して学校時間内に帰校し得る範囲とする。と記され,『郷土の観察』の場合と全く同じである。
- 17) この理由については,他教科の教科書の編纂状況などの点に関して検討を要するので,現在のところ不明である。
- 18) 『郷土の観察』では,教材の選択と排列について「郷土の実情に即して教材を適当に取捨し,補充し,総合し,また排列の順序を変更し,適当の題目を選ぶ等,最も適切な細案を編成すべきである」(p.42)と記述してあり,かなり弾力的に扱っている。
- 19) 例えば,「三,野山の状態」の中の「海岸と海」に関する記述では,朝鮮の西海岸は,遠浅で潮汐干満の差が大きく泥海であるから,それが海の色に影響している。とか,東海岸は海水が清澄で急に深くなっている,というように当地の例を取り入れている。
- 20) 「十六,冬の寒さ」では,いわゆる「三寒四温」について解説されている。
- 21) 「眼の前に広々と見える海面は,世界の海と相連なっていることを説明し,万里の波濤を乗り越えて行けば,世界のどこへも行き得る事などを考えさせて,海外発展の志操を喚起させ,海へのあこがれや関心を深めさせるのがよい」(p.81)とある。
- 22) 前掲7), p.273によれば,昭和17年度の朝鮮における国民学校数は,合計約5,500校であり,朝鮮人188万人,日本人9万9千人が就学していた。
- 23) 内地における国民学校の就学年限は,国民学校令第三条に示されているように,初等科6年,高等科2年,計8年である。

第1表 『環境の観察』と『郷土の観察』の構成の比較

『環境の観察』教師用書の構成	『郷土の観察』教師用書の構成
総説(48ページ) 省 略 各説(159ページ) 一、展望 二、私共の学校 三、野山の状態 四、空模様 五、雨降り 六、夏の暑さ 七、人々の仕事 八、田畑の作物 九、山や海の産物 十、人の往来 十一、物のうんばん 十二、とりいれ 十三、仕事場 十四、市場と店 十五、郵便と電信 十六、冬の寒さ 十七、冬の生活 十八、役所 十九、私共の村や町 附録(10ページ) 要塞地帯及び軍機保護法	総説(47ページ) 省 略 各説(103ページ) 一、展望 二、学校 三、山・川・海など 四、気候 五、産業 六、交通 七、村や町 八、神社と寺院 九、史蹟(附、名勝・天然記念物) 附録(30ページ) 国民学校教育に関係ある軍事取締法規に就いて

第2表 「環境の観察」の年間指導細案

学 期	月	題 目	時 限	小 計
1	4月	展 望	4	14
	5月	私共の学校	3	
	6月	野山の状態	4	
	7月	空模様	1	
		雨降り	1	
		夏の暑さ	1	
2	8月	人々の仕事	1	17
		田畑の作物	2	
	9月	山や海の産物	2	
		人の往来	2	
	10月	物のうんばん	2	
		とりいれ	2	
		仕事場	2	
11月	市場と店	2		
	郵便と電信	2		
3	12月			8
	1月	冬の寒さ	2	
	2月	冬の生活	2	
		役所	2	
3月	私共の村や町	2		